

十卷章の資料論

— 読曲の問題を中心として —

山 本 隆 信

はじめに—十卷章の素読について—

本宗から令和五年に出版される『十卷章』（以下『智山版十卷章』と表記）は「読みにこだわる」という点に特色の一つがある。文章の意義の理解はさておいて、一言一句の読みを重視して声を立てて読むことを「素読」といい、漢文学習の初歩とされる。近代の学制が整備される以前、かつての宗学の学び方において、十卷章を四声点（平声・上声・去声・入声）をたよりとして素読によって学習するという伝統があつて、それを「声読み」という。まだ寺に入つて間もない童子がこれを行なうので「稚児読み」とも称され、古く奈良の大寺でも行なわれていたとされる。中川善教（一九〇七）がこれについて次のように伝えている。

南都古寺の「稚児読み」に相当するのが、高野山の「声読み」である。新発意の雛僧が登山入寺の最初に、四声点に従つて十卷章の素読が課せられる。これを「声読み」と謂う。近頃聞くことが少くなつて、今は昔、

五十年を過ぐる古い憶い出になるが、新発意の大勢登る三月末から四月へかけて、通り過ぎる院院の表部屋から会下から、甲高い声に力をこめて、四声点をたどる「声読み」が聞かれたものである。これがやがて伝習する声明への声の地ならしにもなったのである。^①

中川師がこのように記したのが昭和五年（一九七六）のことであるから、おそらく大正末期頃までは十卷章の素読の伝統が連綿と伝えられ、桜の花が舞う頃に雛僧たちが十卷章を読み上げる声が聞こえてくるという、祖山の牧歌的な風景がどこでも普通に見られたものと思われる。

十卷章の声読みはいつ頃から始まったのか。その起源を中川師は鎌倉時代のことと推察し、やがて一般化したのは宝性院宥快（二三四五）と無量寿院長覚（二四六）が互いに教学の研鑽に励んだ応永義学の大成の頃であろうとしている。^② 鎌倉期の新義の学僧・頼瑜（三三〇四）の著作には「点に云く」「文点に云く」という表現がしばしば見られる。この「点・文点」とは、文節毎に句読点・返り点・送り仮名・乎古止点等が付された教科書的なテキストのことをいう。弘法大師の著作を読む際に、諸本を比較参照して、古訓点の異読に注意しながら読み解くという、文献学的な研究姿勢がそこには見られる。また現行の高野山大学版『十卷章』には四声点が一字に二カ所付されることがあるが、それは寿門と宝門との相違に依るものであるとされる。また、空海撰述書の伝本は院政期（十二世紀）に入ってから急速に増加して、鎌倉時代に入ると急速に乎古止点は使用されなくなり、仮名点が増えることになっていくという。^③ こうした周辺事情からも、中川師の推察は、おおそ正確なところを言い当てていると思われる。

素読教育それ自体は、おそらくは弘法大師空海も幼少期に叔父の阿刀大足から手ほどきを受け、また大学寮でも実習したことであろう。古典漢文の素読は、八二八年に空海が開校した綜芸種智院でも重視された。その教育

方針を記した「綜芸種智院式」⁽⁴⁾には、儒教（俗）の学問を基礎学として重視し「俗の博士教授の事」として、「若しは音、若しは訓、或いは句読、或いは通義、一部一帙、瞳矇を発くに堪えたらん者は住すべし」と定めている。大学寮で行なわれる音訓・句読等の素読指導、内容の教授を学習項目として挙げている点からも、素読を中心とした学習教育法は綜芸種智院でも踏襲されたと考えられる⁽⁵⁾。素読の伝統は、その後千年以上も継承されてきたが、現代になって失われてしまい、本宗では那須政隆（二八九七）⁽⁶⁾ 猥下が伝統宗学の最後の継承者とされるように、その命脈はほとんど途絶えてしまっている。

名目について

一般的に、仏教文献（内典）は呉音で読み、漢籍（外典）は漢音で読むのが古来の習いであるが、同じ仏教語でも各宗に伝わる独特の読み方がある。例えば「種子」は真言宗では諸尊を表徴する梵字をいう場合は「シユジ」と読むが、法相宗では心意識に沈潜する可能態をいう場合は「シユウジ」と読むように、同じ語でも文脈や宗派によって読み方が異なる。はたしてこうした細かな読みの相違は、空海の時代から読み分けられていたかどうかという点はわからないが、空海自身の手によるものとされる訓点も存在し、古来、音の教授も重視されるから、表記読みだけでなく、表音の高低・屈曲・抑揚にも当然意を向けられたと推測される⁽⁶⁾。後世の文献にも、呉音と漢音では、同じ語であつても四声⁽⁷⁾が異なることが説かれる。例えば仏教語の「大乘」の場合、大は平声であるが、漢語の「大意」の場合、大は去声になる。「聖人」も呉音では「シヨウニン」と読み、四声は「平去」であるが、漢音では「セイジン」と読み、四声は「去平」となる。秀吉によって焼き討ちされる前の根来寺の修学・論義作法を伝えた『塵塚』という書物では、さらに四声に加えて、大伝法院学頭・五智房融源（一一六九頃）が、初め

て平声軽・入声軽、新濁・本濁・フ入声の区別を勘案し、都合十七通りの声読みが判然と区別されるようになったと伝えられる。⁽⁹⁾もしこの伝承が事実とすれば、他山に先駆けて新義が声読みの形式をつくり、それ以後、他山も踏襲して厳密な声読みの伝承を行なっていたことになるが、確証的なことは何も言えない。しかし新義真言が非常に古くから厳密な読みにこだわっていたことがこの一事からも伺うことができよう。

こうした呉音と漢音の区別、四声点に基づく厳密な発音に加えて、さらに辞書にはあまり載らない特殊な読みが加わってくる。江戸期に入ると、各宗に慣用的に伝わる特殊な述語の読み(名目)を集めた書物が出てくる。江戸初期の智山の学僧である観心^(二六五六)が著した『補忘記』という書物は「根来寺名目集」⁽¹⁰⁾という副題が付されている。『補忘記』によれば、この名目には、南都・北嶺の別があつて、次のように分類される。

北嶺		南都				
寺門名目	三井寺	唯識名目	興福寺・東大寺			
山門名目	比叡山	南山名目	高野山(宝性院・無量寿院)			
		根嶺名目	根来寺(小池坊・智積院)			
		三論名目	東大寺上生院			
		華嚴名目	東大寺四聖坊			
		律家名目	南・西大寺・唐招提寺、北・泉涌寺			

このように各宗の名目が有力な学問寺には伝わっていた。法華・華嚴などの經、律、唯識や三論などの論、こ

これらの三蔵の一分を所依とする宗派にとって固有の名目があり、各山に慣例として伝わっているとされる。¹¹⁾ 真言の場合、同じ真言宗でも高野山（南山）と根来寺（根嶺）とでは、その名目の伝承が異なる。例えば「用」は他宗では「ユウ」と読むが、新義では「ヨウ」と読み、これは「中性院不共の名目」¹²⁾とされる。新義の読みは根来読みとか、根嶺読みとも称され、本来は豊山（小池坊）も智山（智積院）もその大元は同じ根来寺にあるはずであるが、長谷と洛東にそれぞれ分かれてから、歴史的に積み重なっていった所伝に変化が生じて、豊山と智山とでも名目・読みが異なる場合がある。

読曲について

名目・読みは時代と場所によって変化していき、師伝や相伝によって異なっていた。そうした特殊な読みを「読曲」¹³⁾という。『広辞苑』によれば次のように記される。―「よみくせ【読癖】習慣となっている、漢字の特殊な読み方。南殿（ななで）・冷泉（せいでい）の類。故実読み。慣用読み。―『広辞苑』の「読癖」と「読曲」とでは癖と曲の漢字が異なるが、その定義は同様であり、いわば慣用的な読み（idiomatic reading）¹⁴⁾のことである。慣用であるから、何故にそう読むのかという根拠を問われても、そのように読むのが慣例であるからとか、師からそのように教わったからとか、古文献に記されているからとしか言いようがないものである。以下に諸種の読曲資料を列挙してみる。

十卷章の読曲資料

本論文で主に使用する読曲文献は次の三種である。

- ① 智山『十卷章読曲』一冊、智山書庫七棚一〇箱四番、明治十三年（一八八〇）栄成本の書写、大正十五年（一

九二六⁽¹⁵⁾ 智山勸学院有志書写（以下、『読曲』と略記）

② 豊山『拾卷章読曲備考』一冊、大正九年（一九二〇）青木恭仁書写（以下、『備考』と略記）

③ 新義『十卷章（南山／根嶺）読書撮要』一冊、刊写不明、赤塚祐道師蔵本（以下、『撮要』と略記）
その他の読曲文献として次のものがある⁽¹⁶⁾。

① 涼禪『十卷章 即玄談 通科文 読曲 全』一冊、貞享四年（一六八七）鏝瑞書写

② 信有『十卷章読曲』一冊、延享四年（一七七七）貞雄書写

③ 超倫『十卷章読曲』一冊、安永三年（一七七四）秀山書写

④ 『十卷章玄談并読曲』一冊、天明五年（一七八五）鏝慶、九州教区七番青蓮寺蔵⁽¹⁷⁾

⑤ 『十卷疏読曲』一冊、明和八年（一七七二）卓山、新潟第三教区二一番弘誓寺蔵
関連する資料として次のものがある。

① 観心『補忘記』二卷、貞享四年（一六八七）

② 『塵塚』一冊

③ 祐宜『大疏百条第三重読曲』一冊、永禄六年（一五六三）、智山書庫三〇棚三〇箱

④ 祐宜『釈論百条第三重読曲』一冊、永禄十二年（一五六九）、智山書庫六棚二箱⁽¹⁸⁾

⑤ 『御遺告読曲』一冊、智山書庫二七棚二三箱三番⁽¹⁹⁾

⑥ 『読曲難字分』一冊、智山書庫二七箱五一箱五一番⁽²⁰⁾

⑦ その他⁽²¹⁾

研究書として次のものがある。

- ① 大沢聖寛・栗山秀純「一九九六」『小田慈舟大僧正伝授「十卷章」素読解説』北辰堂
- ② 佐藤隆賢「一九七二」『十卷章の読曲について』『智山学报』二〇
- ③ 国語学関係の諸論文⁽²²⁾

上記の読曲資料の他にもまだ他山の聖教文庫には種々の名目集・読曲資料が所蔵されていると推測される。

十卷章の読曲資料の内容について

次に『読曲』（智山所伝）・『備考』（豊山所伝）・『撮要』（新義所伝）の三種の読曲資料を比較してみよう。この三者を取り上げた大きな理由は、『智山版十卷章』では、この三者を参照しながら版本との異同を注記しているからである。また第二の理由として、『読曲』、『備考』、『撮要』の三者によって、新義系の所伝はほぼ網羅できると考えられるからである。

高野山の読みについては、『智山版十卷章』が底本として使用した堅康・弘現・覚本の三版本は、いずれも万治三年（一六六〇）刊（享保十七年（一七三二）再治）の高野山版に書き込みをしたものであるから、高野山（南山）の読みは一応確定したものと考えられる。三種の読曲資料の総項目数を比較してみると次のようになる。項目は読曲だけでなく、出典・注記に属する項目も含む。また重複する項目はカウントしたが、判読不明な項目は含めなかった。

読曲資料の項目数

読曲資料／十卷章			
『讀曲』	51	即	
『備考』	53	声	
『撮要』	84	吽	
	77	二上	
	54	二下	
	133	宝上	
	257	宝中	
	123	宝下	
	45	秘	
	56	菩	
	933	計	

項目数は『讀曲』が一番多く、一番少ない『備考』と比べると一・四倍になる。もっとも大きな相違点は、『讀曲』の『秘藏宝鑰』部分の項目が他の二者と比べてかなり多いことである。『讀曲』の『秘藏宝鑰』部分を比較すると、一番少ない『備考』と比べると一・九倍になる。即断はできないが、相違する理由として以下の諸点が考えられよう。

第一には『秘藏宝鑰』巻中には「十四問答」が説かれ、これは玄闍法師（仏者）と憂国公子（儒者）との対論問答であるから、呉音・漢音の区別が難しく、初学者には多くの指導が必要になる。そのために必然的に注記が多くなったという側面があるかと思われる。

第二には、『秘藏宝鑰』は他の巻に比べて空海の詩頃の才が遺憾無く發揮されている点が挙げられる。漢詩を理解するには精緻で高度な知識が必要である。漢詩は必ず押韻がなされ、平仄の規則に従う必要があり、さらに呉音と漢音の声調と音訓の区別を考えなければならない。今の時代であれば漢和辞典を繙けば判明することであるが、漢詩の読解に際しては、四声点に従って抑揚・発音を正確に読むために多くの努力が払われたことである。

うし、より多くの注意を払う必要があったと思われる。そうした努力と注意が読曲の注記に反映されていると考えられる。

第三には、頼瑯の『秘蔵宝鑰勘註』に始まり、洛東智積院に移ってから智山第七世運徹（一六九三）『秘蔵宝鑰纂解』、智山第十一世覚眼（一七四五）『秘蔵宝鑰撮義鈔』、智山の学匠亮海（一七五八）『秘蔵宝鑰講筵』など、智山における『秘蔵宝鑰』研究が特に盛んであったことも理由の一つとして挙げられるであろう。

そして最後に最も重要であると思われる点が、智積院新文庫に伝来する賢秀本『秘蔵宝鑰』の存在である。この第四点については「十卷章の資料論」の節で詳述したい。

さて次に、各山の読曲資料の内容について検証してみたい。特に版本と読曲とで読みが相違する項目、また読曲資料の間で読みが相違する項目について見ていく必要がある。次に示す表は、即・声・咩の三義書中で、版本と読曲間で読み情報が相違するケースについて対照させて図示したものである。相違するケースのみを挙げた理由は、版本と読曲とが同じ読みを示している場合は、特に読みに関しては問題がないので例示する必要はないと考えられるからである。三種の読曲資料は、三義書に関する限りでは、項目数もほぼ同じで、項目の内容もほぼ同じである。もちろん三者の間では項目に少しばかりの出入があつて、また各項目の内容に多少の差異はあるが、やはり引つかかるところはどこも同じと見えて、三者は非常によく似ていると言つてよい。三義書の項目数は、『読曲』一八八項目、『備考』一八六項目、『撮要』一八〇項目である。智積院を基準にすれば『読曲』一八八項目中、実に一六八項目が『備考』・『撮要』と重なる項目である。つまり三者は約九割方、同じ項目を取り上げており、内容をほぼ同じくしている。図は、上段に版本（堅康・弘現・覚本）の読みを示し、その下に三種の読曲資料の読みを対照して示した。最下段には『智山版十卷章』（本文篇）の頁行を示し、必要に応じて元の高野山

版(版)(堅)(現)(覺)の読みを注記情報として記した。
 版本と読曲資料の異同

	版本	【読曲】	【備考】	【提要】	頁行／注
羯磨 こんま	説キ玉ヘリ	南山にはトヒ玉フ。根来にはトキ玉フ	同	同	即九・三。版説玉
能所 のうしよ	眞言法 しんごんぼう	法 南山半濁 ・ 根来濁 又直に読時はボツと全濁 音点に読時は半濁也	法 南清、根濁、以下は同	【備考】同	即一〇・一〇
達り いたり	成 立 じょうりゅう	ボウヂ 南山シヨウリツと読む シャウリウと読也	ボウチ	【読曲】同	即一二・八
火輪 アリ	声聞・縁覚 しやうもんねんかく	此の捨て仮名をナリの響に読む	同	同	即一四・二。版ジ ヨウリユウ
		「声聞・縁覚」。「縁」は音便による	同	同	即一四・六
		達 南山は清 根来は濁	同	同	即一五・四
		所 南山は濁、根来は清也	同	同	即一六・四。版ダ ツシ
		南山はカツマ、根来はコンマ、泉山禪 家にはケモ	同	同	即一六・八。版所 (平声清)
		同	同	同	即二〇・一。版コ ンマ

十卷章の資料論 一読曲の問題を中心として一

七例 しちれい	応スル ようする	風気 ふうき	研心遊意 けんじんゆうい セヨ	教法 きやうほう	迷ヘル まどへる	三法 さんぽう	四種ノ身有り しゆしゆのみのり	教法 きやうほう
ヒチレイ	ヨウズル、ヲウズル	フウケ	南山はゲンシンユイセヨ、根来はゲンジンユウイセヨ	法 南山濁、根来清	マドヘル、マヨヘル可	法半濁に之れを読む也	四種身直に読む可し。身の字南山は濁、根来は清にて之れを読む可き也	法 南山濁、根来清
	同	同	南は心濁、遊を奥と唱う、根は心清、遊を宥と引く	同	摩与恵留可也		同	同
シチレイ	同	同	南ケンジンユイセヨ、根ケンジンユウイセヨ	同	マトヘル南、マヨヘル根也	同	同	同
声二七・六	ヨウ 声二七・六。版平声。Ⓢ去声。Ⓣ現	ウケ 声二七・三。Ⓢフ	ヨ 声二六・一〇。Ⓢゲンジンユウイセ	異なる 声二六・九。即と	声二六・五	即二一・七。Ⓢ法(入声清)	即二一・一	即二〇・六

諸法界 ほつがい	知ツ玉フ	地平 ナルコト	等至三昧 とうじさんまい	分相 ぶんさう	分折 ぶんじやく	極微生 しゅう	安危 あんき	積集スル	顕色 けんしき	拔キ苦ヲ与フ楽ヲ	字輪品 じりんほん	避遠 ひおん	八転 はつてん
ハウカイ	南山 シツ玉ヘリ、根来シリ玉ヘリ	平 南山漢音読 根来吳音読	三 南山清 根来濁	トノ点を讀べし	折 南山濁 根来清	生 南山濁 根来清	南山濁 根来清	積集セル	南山濁、根来清	南は訓点に讀む、根来は直に讀む	品 南山は濁、根来は清	ヒエン、ヒラン	ハツチン
ホツカイ	同	同	同	分ノ相ト点に讀む	同	同	同	積集スル	同	同	同	同	—
『備考』同	同	同	同	『備考』同	同	同	同	『読曲』同	同	同	同	同	ハツテン
昨四六・一	昨四五・七	声四〇・五	声四〇・五	声三七・七	声三七・四	声三七・三	声三六・一〇。版 危(平声清・上声濁)	声三四・一〇	声三四・三。版色 (入声清)	声三三・三	声三〇・四	声二八・三	声二七・六

十卷章の資料論 一読曲の問題を中心として一

妙 <small>みょう</small> 不 <small>ふ</small> <small>ニ</small> サルコト	宝所 <small>ほうしょ</small>	驚 <small>きょう</small> 覚 <small>かく</small>	儼然 <small>げんぜん</small>	決定不定	決定ニ乗	日月 <small>にちがつ</small>	日月星辰 <small>にちがっせいしん</small>	無一合相 <small>むいちごうそう</small>	荒獵 <small>こうりよう</small>	遺余 <small>ゆいよ</small>	法界 <small>ほっかい</small>
タイナラザルコト	所 根来は清、台家は濁	覚 南山濁、根来清	然 南山は清、根来台家は濁	決定ハ不定ニシテ	ケツジャウノニジヨウと読む可し	ジツゲツ	ニチグワチシャウシン	合の字、ツの入声	クワウラウ	イヨ	—
妙ナラザルコト	濁也 南清、根濁、台家	同	計無世字	同	計津志也字仁志也	同	志無 仁知俱和津志也字	合の字、婦入声	同	同	保字加伊
ルコト	『備考』同	同	ゲンゼン	同	決定ノニ乗	同	『読曲』同	合の字、又入声	クワウレウ	同	ホツカイ
昨五九・九	昨五五・二	昨五五・二	昨五五・一	昨五四・一一	昨五四・一〇	昨五四・五	昨五四・四	昨五二・四	昨五一・八	イヨ 昨四九・一〇。⑧	昨四六・一

遺穢 <small>ゆいゑ</small>	円 <small>えん</small> 不 <small>ふ</small> サルコト	円カンゼ	マドカナラザルコト	マドカンセサルコト	昨 <small>しゅう</small> 五 <small>ご</small> 九 <small>く</small> ・九
イエ・ユイエ	伊恵	『備考』同	昨 <small>しゅう</small> 六 <small>ろく</small> 〇・二		

以上、版本と読曲とで読みが相違する箇所について適宜その異同を示した。ここで示した四六項目の他にもまだ異同は存し、複数の読み方を挙げる箇所はどちらを採用するか判断としないために、あえてここでは除外してある。即・声・吽の三義書だけでも一八〇項目以上の読曲情報があるが、版本では実にその四分の一に相当する読曲が採用されていないことがわかる。新義・豊山・智山の三者の読曲はそれぞれ微妙な差異があることも見てとれるが、三義書ではほぼ同じ内容であって、むしろ読曲資料間の同質性と比べれば、版本と読曲の異質性の方がはるかに大きいと言えよう。読曲の指示通りに版本でも記載されている例として「用よう、瓔よう瑠ろう経きやう、衆しゅう多た南なんだだ、五ご音いん八はつ音いん南なんごごいいんん、四し種しゆ身しん南なんししんん、地じ墨もく南なんじじ、三さん句く南なんききんんくく、因いん」などがあ
み分ける語句は、むしろ全体の用例としてはかなり少ないと言える。また南山においても一様ではない語句の一例として「能所」を挙げるならば、宝門では「ノウシヨ」、寿門では「ノウジヨ」と読み、「所」について清・濁の相違があると伝えられる。³⁰⁾しかし読曲資料によるならば「南山は濁、根来は清」とされ、版本では「ノウシヨ」と清音で読むことが示されており、南山・根来の両者とも必ずしも伝承通りではない。版本と読曲の比較考察は、様々な伝承を参照しながら十巻章の全体にわたって精査する必要があるが、紙幅の都合もあり、また煩瑣にもなるので、全体にわたる精査は今後の課題としておきたい。

版本では読曲がそれほど重視されていない理由として、以下の諸点が考えられよう。

第一として、成立年代の相違が挙げられる。版本の奥書によれば、版本の注記は運敵（二六九三）由来とされる。今回使用した読曲資料である『撮要』の成立年代は不明であるが、『読曲』は明治十三年（一八八〇）、『備考』は大正九年（一九二〇）の成立である。つまり江戸初期の運敵の所伝と、近代の成立である読曲資料とは、二百年の歴史的な隔たりがあるために所伝が変化していると考えられる。もともと『読曲』・『備考』は書写年代が近代であるというだけで、読曲には少なくとも江戸初期からの伝承が含まれていることは言うまでもない。読曲資料は、近代に至るまで歴史的に積み重なった伝承の集成であると考えられる。そして版本もまた江戸初期の運敵由来とは言え、確実な年記は堅康本の書写年代が一七九七年、弘現本が一八四七年（または一八七六年）であって、これは江戸後期から明治期に属する。つまり版本と読曲資料の確実な成立年代はそれほど隔たっているわけではない。むしろ両者の年代は重なりあう部分もあるとなれば、もしかしたら成立年代の相違に帰結すべき問題ではなく、両者の所伝の系統がそもそも異なっているからということになる。それ故に版本の校合者である運敵がキーマンとなると考えられるが、この問題については次節で詳しく述べていきたい。

第二として、使用している版本がそもそも高野山版であるために、版本は南山読みをベースとせざるを得ないという側面が大きな影響を及ぼしていると考えられる。十四世紀から十六世紀にかけて根来寺は祖典の開版事業を独自に行なっていたが、天正の兵火によって版木を焼失して以降、江戸期を通じて根来寺・長谷寺・智積院には新たな根来版に基づく十卷章を開版する力がもはやなかった。⁽³²⁾新義もまた高野山版に依拠するほかなかったのである。また江戸期の智山の学僧・注記者（堅康・弘現・覚本）たちは、高野山版に異同を書き込みしているために、それぞれの注記者の間でも情報の取捨選択と整理が行なわれている。時代の移り変わりとともに根来読みの独自性は些細な相違として顧みられなくなり、高野山版のもともとの情報の中に埋没・吸収され、読曲の伝

承は廃れてしまった可能性がある。

第三として、師資の伝授は非常にパーソナルな性質を有するという側面がある。同じ師から教わっても、書写及び読み渡しの伝授の際に、写し間違いや聴き誤りがどうしても生じるものである。師資への伝授は現場で肉声によって伝えられるものであるから、発声・ヒアリングの能力・資質によっても差異が生じる。読曲の中には、読み渡しの伝授阿闍梨の方言特性に由来するものも見られ、七を「ヒチ」と言ったり、妙を「タイ」と言ったり、シとヒ、イとエの混同が見られ、発音を正確に写し取るうとした形跡がある。

右記の様々な理由により、版本と読曲の間には、共通する側面と、相違する側面とが見られるが、読曲資料間の共通性に比べると、版本と読曲の間では異なる点が多く見られ、両者は内容において相違する箇所がかなりの数にのぼることがわかったと思う。先述の通り、三者の読曲資料間の相違は、三義書に関する限り、それほど大きいものではない（『秘蔵宝鑑』では、かなり大きな相違が生じてくるが、その理由は後述する）。『智山版十卷章』は版本（堅康・弘現・覚本）を底本とするために、版本の情報が表になり、読曲の情報が裏になるわけだが、版本と読曲の相違がかなりの数にのぼり、歴史的な読曲の伝承があまり採用されていない以上、江戸期の智積院の読み方というのはその定義が困難であり、いずれの資料を底本に置くか、どの情報を重視するかという視点の相違によって読みは変化し、決定もされる。つまり十卷章の読みの伝承は、時代・場所・人物・資料によって異なり、実に多様なものであったと考えられる。

十卷章の資料論

堅康本・弘現本・覚本本の系統

ここで改めて『智山版十卷章』で使用した諸版本の書誌情報と人物情報を、年代順に系統立てて整理しておきたい。底本に用いたのは堅康・弘現・覚本の三版である。注記者である長彦房堅康（一七六九）は山形・米沢の出身で米沢城下の勢至山法光院に住した。智積院の柳寮で寛政九年（一七九七）二九歳のとき、十卷章を書写している。義観房（俗姓丹藤氏、また伊佐氏とも記す）弘現（一八七〇）は佐渡大杉の出身で明治二年（一八六九）に智山第四十世になった、江戸末期から明治初期にかけて活躍した僧である。弘現本の書写年代は弘化四年（一八四七）、または明治九年（一八七六）である。36 覚本の生存年代・書写年代は不明である。

三版とも万治三年（一六六〇）刊（享保十七年（一七三二）再治）の高野山版（高野山応盛添削）37に書き込みを加えている。堅康本の奥書には次のように記されており、弘現・覚本の奥書も運敵までは同様に記している。本来であれば三版の全巻の奥書をあげるべきであるが、書写の日付が異なるだけで大同小異であり、煩瑣にもなるので、最後の巻である『菩提心論』（堅康）のみ記しておく。堅康本では智山第二一世等空（生年不詳）の御真本を元にした、等空の弟子泰音の本をもって書写したとある。

永仁二年³⁹甲午十二月十二日於中性院一部十卷私意樂任點畢 是偏為初心末学歟 後賢刊定而已

南山隱老權律師 頼瑜六十九

天文十三年八月十五日夜點畢中性院頼瑜御正本申請點之 後学縦声假名之不審雖有之不可直

二三遍校合了

純亮

寛永四年^{丁卯}九月十五日写點了

正運

賢秀

慶安元年五月念日舊點校合今以朱点之以墨加之

安樂壽院沙門

運敵

寛政九年^{丁巳}四月二十二日僧正等空御真本御弟子泰音法印之御本^ヲ以書写畢

洛東智山之内長彦 堅康^{二十九}

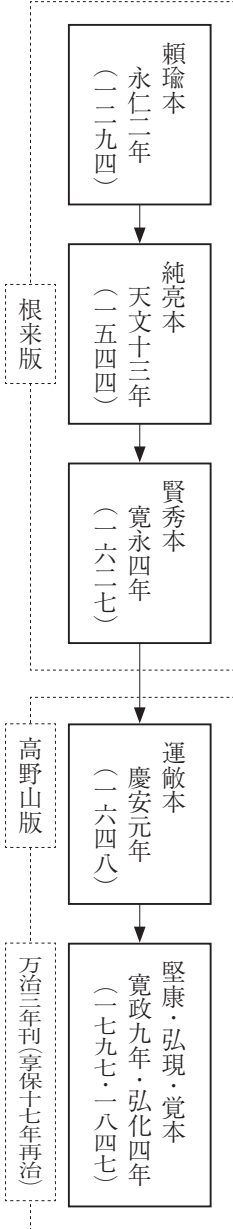
また弘現本・覚本の奥書は慶安元年の運敵までは同様^ニに記す。また『即身成仏義』(堅康・弘現)の奥書にも頼瑜・純亮・賢秀の系譜を記すが、これは後述の賢秀本『秘蔵宝鑰』巻中の奥書を写したものである。なお弘現本では以下の文を加える。

弘化四年^{丁未}三月廿五日至四月八日 合十三席疏章講讀畢 義観識

于時弘化五年^{甲申}從二月四日至十七日十三席疏章講讀畢 義観弘現^{法闍十七ヶ年 世寿卅一歳}

すなわち堅康・弘現・覚本の三版に至るまでには、次のような資料の系統が想定される。

資料の系統図



賢秀本について

頼瑜本、純亮本、賢秀本、運敵本のうち、頼瑜・純亮・運敵の自筆本は失われてしまい、今に現存するのは智積院新文庫に伝わる賢秀本『秘蔵宝鑰』上・中・下の三巻のみである。この賢秀本は、令和二年に智山派宗務庁より発行された『新文庫目録』⁴⁰で初めてその存在を確認することができた。十卷章のうち『秘蔵宝鑰』三巻だけが現存し、他七巻は所在不明である。賢秀本の版本の体裁は一頁六行・一行一七〜一八字で高野山版とほぼ同じである。筆者は根来版を未見であるが、根来版に詳しい赤塚祐道師のご教示によれば、根来版には声点の記載がないとのことである。賢秀本の版本は高野山版とは書体が異なり、元から声点の記載がなかったように見えるから、今に残る極めて貴重な根来版であると思われる。賢秀は純亮本を親本として、根来版に朱墨で声点、仮名、朱引、区切等の書き込みを丁寧に加えている。

卷上

賢秀本の奥書には次のように記されている。煩を厭わず三巻の識語と奥書を挙げておく。

〔表紙裏の識語〕

墨点声假名朱引朱ノ句切朱導 頼―御本也

朱点声假名以別本写之了 是又根来寺点也

〔奥書〕

御本云 永仁二年三月二日於南山私之意楽任点畢

頼―^{春秋}六十九

天文十三年五月二日於根来寺以中性院御正本点了 純亮

寛永四年^{丁卯}九月三日予具写点了

正運 賢秀

卷中

〔表紙裏の識語〕

墨声墨假名并点朱引朱ノ導朱ノ句切 頼―御点也

朱点朱假名朱声以別本点了 是亦根来寺点也

〔奥書〕

御本云 永仁二年九月二日 於中性院一部十卷私意樂任点畢是偏為初心末学歟後賢刊定而已

南山隱老權律師 頼瑜春秋六十九

天文十三年三月十七日 以御正本朱墨点畢 純亮

寛永四年丁卯八月十三日 写点訖 正運 賢秀

卷下

〔表紙裏の識語〕

墨点墨声并假名朱引朱導朱ノ句切 頼―御点也

朱声朱假名朱点以別本之根来点写了

〔奥書〕

御本云 永仁二天甲午九月八日 於紀州根来寺中性院一部十卷私意樂任点 是偏為初心末学也 後賢刊定而已

南山隱老權律師 頼瑜春秋六十九

天文十三年六月十七日 於根来寺以中性院頼―御正本朱墨点畢 後学設不審雖有之不可直 純亮房

寛永四年丁卯八月十九日 以右本点訖

正運 賢秀

以上、賢秀本の識語によれば、墨の声点・仮名・点、朱引、朱の導き、朱の句切は頼瑜の御点である。朱の声点・仮名・点は別本をもつて加えた根来点である。奥書については、賢秀本を運敵はほぼ踏襲していることがわかる。以下に純亮・賢秀の人物情報を示しておこう。

純亮の人物情報

純亮房長禅に関する情報は極めて少なく、生没年は不明である。永仁二年（一二九四）、頼瑜（二三〇四）は根来寺中性院において十卷章を私に意樂に任せて点を施した教本を、初心末学のために作成した。頼瑜の遷化後、二百四十年を経た、天文十三年（一五四四）に、純亮は頼瑜自ら朱墨によって加点した御正本の十卷章を根来寺で書写している。純亮は下総出身の客方の僧であつたらしく、純亮房長禅の名で、天文二年（一五三三）に下総匝瑳長徳寺（現智山派寺院）住職として不動明王像を再修した記録が寺誌に残されている。また天文十七年（一五四八）には下総に帰り同寺で道範著『行法肝葉鈔』を書写している。十六世紀半、寺領七十万石と言われた最盛期の根来寺で修学した、学行に優れた僧であつたことであろう。この純亮本の十卷章はその後八十余年を経て、次の書写者である賢秀へと渡ることになる。

賢秀の人物情報

正運房賢秀の生没年は不明であるが、常陸下妻観音寺（現豊山派寺院）に晋住し、いつ頃移つたかは不明であるが、確実な記録としては寛永十七年（一六四〇）には山科妙智院に転じている。妙智院は、慶長十一年（一六〇六）、智山第二世祐宜（二五三六）と能化職を争つた頼音房恵伝が、玄宥の後住として晋山するも周囲の反対にあつて任を果たせず、家康の仲裁と命により、職を譲る代わりに智積院から移つて与えられたという名刹であつた。また妙智院は元和三年（一六一七）に三宮神社境内に別当寺として創立されたとも伝わる。明治維新後、廃寺と

なっている。

賢秀は、智積院の代替寺になるほどの名刹の住職に就任していることから、智積院のかなりの上座にのぼったことが推察される。洛東智積院草創期における一大事業として、智山第四世元寿（一五七五）が行なった仙洞論議（一六三二）があるが、賢秀はその法会で智積院龍象十傑中、第三席としてその名を連ねている。ちなみにこのとき第二席であった頼心房尊慶（一五八〇）は豊山第五世になり、第四席であった円精房隆長（一五八六）は智山第五世になっている。⁽⁴⁴⁾ おそらく生年も尊慶と隆長の間くらいであったのではないかと推察される。

さて天正の兵火（一五八五）によって根来寺が焼亡し、洛東智積院に移った後、玄宥・祐宜と推移して、智山第三世日誉（一五五〇）が化主の頃には、日誉門下の三傑（秀算・元寿・俊賀）が高野山・南都に留学するなどして、いよいよ向学の機運が高まっていた。智積院の学僧らは法灯を再燃するために、地方に残された善本を今一度総本山に収集する時期にようやく入ったとも思われる。寛永四年（一六二七）、常陸下妻観音寺に籍を置く賢秀は、おそらく常陸・下総の地の利によって入手できた純亮本をもって、根来版に点を写して成ったのが賢秀本の十巻章である。賢秀本『秘蔵宝鑰』三巻にはいずれも一丁右下に「妙智院」の朱押印がある。先述した山科妙智院、賢秀の所蔵印である。賢秀の没年は不明であるが、おそらく妙智院で遷化されたのであろう。賢秀本の十巻章は運藏在世の頃は現存したが、『秘蔵宝鑰』三巻のみが智積院新文庫に残されている。

賢秀は寛永八年（一六三一）には、乗憲房隆鏝（一七〇五）を弟子にしている。⁽⁴⁵⁾ 隆鏝は明暦二年（一六五六）に、師の寺であった常陸下妻観音寺に晋山し、のち江戸愛宕真福寺第五世にのぼった。賢秀も化主の座に就いても決しておかしくない高僧であったが、隆鏝もまた学徳の誉れ高く、智山第七世運敵の後住として、信盛（一六九〇）と隆鏝の二人が推挙されるが、隆鏝は辞退して信盛が智山第八世になった。その後、隆鏝は下総布川徳満寺（現

豊山派寺院)に隠棲している。なお『十結』の編者として名高い隆誉(一七五三)は隆鏤の弟子である。賢秀—隆鏤—隆誉と相承した事教二相の伝承は、智山にとって何物にも代えがたい宝珠である。以下に賢秀の年譜を整理しておこう。

正運房賢秀年譜

元号	西暦	事績
元和五	一六一九	賢秀、醍醐寺三宝院義演から伝法許可灌頂印信を授けられる〔智山年表一一四〕
寛永三	一六二六	賢秀が『薄草決』書写〔全末目録二・一八一〕
寛永四	一六二七	賢秀が『十卷章』書写〔新文庫目録一四五〕
寛永八	一六三一	乗憲房隆鏤(江戸愛宕真福寺第五世)、賢秀の弟子となる〔智山年表一二八〕
寛永九	一六三二	十一月三日智積院長存房元寿化主、後水尾上皇の勅命により中和門院追善のため智積院学僧十名を率いて仙洞御所での論義に出仕する。〔智山年表一三〇〕賢秀は第三席〔常州下妻観音寺 正運房〕として出仕〔智積院史九四〕
寛永十二	一六三五	賢秀、醍醐寺報恩院寛濟から両部印可、伝法許可灌頂印信を授けられる。〔智山年表一三六〕
寛永十五	一六三八	乗憲房隆鏤(江戸愛宕真福寺第五世)、伝法院流の四度加行を行う。また賢秀阿闍梨から伝法院流および西院流を相承する〔智山年表一四〇〕
寛永十七	一六四〇	元寿本『伝法灌頂三昧耶戒作法』を京都山科三宮(妙智院)にて書写〔全末目録二・七七〕

賢秀本と運徹本の方法論的相違

妙智院が所蔵した賢秀本の十卷章は、運徹の手に渡り、慶安元年（二六四八）、運徹が京都竹田安樂寿院で賢秀本を参照しながら高野山版と校合して成ったのが運徹本である。以降、運徹自筆本は智積院の学寮で書写を幾度も重ねていくうちにいつしか散逸してしまったが、運徹本を元に書写した伝本が智山書庫に現存する。それが智山第二一世等空所持伝本を書写した堅康本、年代不詳の覚本本、智山第四十世弘現が書写した弘現本であり、この三版を元に令和五年（二〇二三）『智山版十卷章』は作成されている。

さて、運徹と賢秀の識語と奥書の文言を注意深く見ればわかるように、運徹は賢秀本を参照したが、その「旧点を校合」し、朱墨の加点をした校合本を作成したとしている。運徹以前の版本の系統（純亮本・賢秀本）は、いずれも頼瑠が意樂に任せて点を施した本を、忠実に祖述し正確に「点を写した」転写本である。頼瑠自身は初心末学の未熟な者たちの学習のために作成した個人的な点本（＝教本的なテキスト）であり、後世にもっと優れた学匠らが出て、自分の誤りを正して改訂してほしいと断っているのであるが、後世の新義学徒らは頼瑠の点本を「御正本」として崇重し、たとえ不審な点があっても点本を直してはならないとされ、頼瑠の読み、根来寺の読みを忠実に保持した十卷章の伝承を根来寺では行なっていたと思われる。「転写」と「校合」とでは基本的に文献処理の方法論が異なるが、運徹は後者の校合（あるいは校勘）という文献学的方法を選んだ。なぜ運徹は頼瑠以来の読みの伝承の路線を変更して、転写という方法を採用せずに、校合という方法を選択したのであるか。その大きな理由は、すでに普及して容易に入手でき、利用可能な高野山版を教本として採用したからであろう。または洛東智積院に新たな根来版十卷章を開版するだけの資力は期待できないから、対費用でより教育効果の高い合理的な方法を採用せざるを得なかったという側面もあるかもしれない。いずれにせよ、根来版から高野山版

へ舵取りを切つて、自ら率先して読みの刷新を進めていったところに「近代師」と称される運敵の所以と面目があると言えよう。運敵以前と以後とでは、新義の伝承は決定的に異なり、完全に新しい時代に入ったが故に、運敵は近代師と称されるのであろう。運敵は南山の読みを基本にしなから、必要に応じて根来の読みを参照しつつ、両者を批判的に読解していく独自の方法を採用した。その一例を『秘蔵宝鑰』冒頭の頌で見てみよう。賢秀本と『智山版十卷章』の書き下しを上下二段に对照させ、異説の箇所傍線を引いてみることにする。⁴⁶⁾

〔賢秀本〕

悠悠たり悠悠たり太だ悠悠たり

内外の縑細 千万の軸

杳杳たり杳杳たり甚だ杳杳たり

道を云い道を云うに百種の道あり

書死え諷死えなまかしかば本何が為まし

知らず|知らず吾も知らず

思い思い思い思えども聖も心ること無けん

牛頭草を嘗めて病者悲しみ

断菴車を機つて迷方を眩れむ

三界の狂人は狂せることを知らず

四生の盲者は盲なることを識らず

〔智山版十卷章〕

悠悠たり悠悠たり太だ悠悠たり

内外の縑細 千万の軸あり

杳杳たり杳杳たり甚だ杳杳たり

道と云い道と云う百種の道をしもいわんや

書き死に諷み死すとも本何んが為ん

知らじ|知らじ吾も知らず

思い思い思い思うとも聖は無心なり

牛頭草を嘗めて病者を悲しみ

断菴車を機つて迷方を眩れむ

三界の狂人は狂たることを知らず

四生の盲者は盲なることを識らず

生しょうじ生しょうじ生しょうずれども生しょうの始はじめに暗くらく
死しし死しし死しすれども死しの終おわりに冥くらし

生うまれ生うまれ生うまれ生うまれて生しょうの始はじめに暗くらく
死しに死しに死しに死しんで死しの終おわりに冥くらし

『智山版十卷章』は堅康・弘現・覚本の三版を底本とするから、三版の直系の親本である運敵本の読みを採用している。もし運敵本が『智山版十卷章』の通りであったとすれば、賢秀本と運敵本との間には大きな断層がある。冒頭の頌だけでも、助辞、送り仮名、清濁、構文など多岐にわたる相違があつて、異読は二十箇所に及ぶ。運敵は奥書で「旧点を校合し今之に朱点を以つてし、墨を以つて之に加う」と記しているが、賢秀本との校合はほとんど行なわれていない。賢秀本を見ているはずの運敵は、賢秀が伝えた頼瑜・根来由来の読みを採用どころか併記さえもしていないのである。本当に運敵は賢秀本を見ていたのか、疑われるレベルである。本来区別されるべき「頼瑜御点」・「根来寺点」は、運敵が奥書で言うように「旧ふるい点」として一括され、運敵によつて新たに校勘される過程で取捨選択が行なわれ、その多くは採用されなかつた。むしろ近代師運敵においては頼瑜・根来の古い読みはほぼ無視されていると言つてよい。偉大な先徳である運敵を貶めようとしてこのように言つていゝのではなく、文献から確認される事実としてそう判断せざるを得ないのであるが、むしろ奥書で賢秀本の系譜を記して、根来版と高野山版との断層の存在を暗に伝えた運敵の誠実さを思うべきなのかもしれない。

しかし賢秀本の十卷章のうち『秘蔵宝鑰』のみが後世まで伝存しているために、もし運敵以後の智積院の学僧らが賢秀本『秘蔵宝鑰』を参照することができたならば、異読が非常に多いことに気づき、そうした異読を読曲として採取したり、注記したりして、項目が増えることになるはずである。読曲とは歴史的に積み重なつた異読の伝承の集成であるから、そうした異読が智山所伝の『読曲』に反映されたとも考えられる。煩瑣になるので一々

示さないが『読曲』の中には賢秀本由来の項目が散見する。『秘蔵宝鑑』に関して智山所伝の読曲項目が他の読曲文献と比べると非常に多くなっている遠因は、賢秀本『秘蔵宝鑑』の存在が歴史的に影響を及ぼしている可能性が理由の一つとして考えられるが、この問題は、さらに詳細な検討を要することであり、すでに紙幅も超過しているので、後世の学者にゆだねることにしたい。

まとめ

智山伝法院では、江戸期の智積院で学ばれていた読みをできうる限り復元することを目指したとして、『智山版十卷章』は読みにこだわったという点に一つの特色があるとされる。しかし各種の版本を参照し、資料の系統を検証して、読曲文献と比較対照する限り、十卷章の読みの伝承は、時代・場所・人物・資料によって異なり、実に多様なものである。ゆえに私は「江戸期の智積院の読みを復元する」という研究スタンスは成立しないと考えている。そのわけは、第一に「江戸期の智積院」という時代設定が、漠然としすぎている。江戸時代は二七〇年と長いので、時代区分で初期・中期・後期・末期とあるが、江戸時代のいかなる歴史区分に属するのか、規定が曖昧である。底本に用いた三版の注記者である堅康も覚本も生存年代は不明であり、弘現の生存年代は明治にかかっている。堅康の書写年代は一七九七年、弘現の書写年代は一八四七年（または一八七六年）とはつきりしているが、これは江戸後期から明治期に属する。賢秀は戦国時代の一五八〇年代初めに生まれたであろうことが推測され、活躍年代は江戸時代初期であるが、賢秀本の読みは頼諭以来の根来時代の読みを濃厚に残している。運敵の生存年代は完全に江戸時代初期に収まる。『智山版十卷章』で智山・豊山・新義の読曲資料として参照した『読曲』・『備考』・『撮要』は、『撮要』は刊記不明であるが、他は近代の資料である。しかし、読曲文献の内

容には歴史的にかなり長いスパンにわたる伝承が含まれている。『智山版十卷章』で使用された諸資料の年代は実に多岐にわたっている。時代規定が不明確にならざるを得ないから漠然と「江戸期」としか言えないのであるとするならば、規定すべき概念の内実がないのであるから、そのような概念規定の曖昧な言葉を表面に出すべきではない。

また「江戸期の智積院の読み」と言うのならば、高野時代の大伝法院の読みや、根来時代の智積院の読みや、明治時代の智積院の読みがあるのか、という話になるであろう。またその中で江戸時代の読みが、何故に尊ばれるべきものなのか、その理由を示さなければならぬが、江戸期が尊重される時代として選ばれる理由は自明なものではない。時代的に廃れて省みられなくなってしまうような読みであるならば、そのようなものを復活させようというのは時代錯誤であって無意味であるという主張がなされてもおかしくない。十卷章に読曲というものがあることを知っている有為の教師ならば「智積院独自の読み方」とはいわゆる「智山読み」のことかと思うであろうが、縷縷論じた通り三版では読曲があまり採用されていない。堅康・弘現・覚本の三版が三様の情報を記している場合（そういうことが往々にしてあるのだが）、江戸期の智積院の読みはバラバラであり、復元されて浮かび上がるような実体など存在しないということになる。すなわち江戸期の智積院で学ばれていた十卷章の読みを復元するという試みは、まるであるいはもしない虚像の影を追っているようなものであり、そもそも全く不可能なことになる。

以上のことから、もし『智山版十卷章』の特色と、このテキストが目指した目的を正確に表現しようとするならば、「運敵由来と伝承される読みを、伝統的な新義系の読曲を参照し校合した点に『智山版十卷章』の特色がある」と言うべきであると私は考えている。運敵は歴代能化の中でも屈指の大学匠であるから、本宗が弘法大師

ご誕生千二百五十年を記念するにあたり、智山の十卷章としてこの書が世に出されるのは、まさに時宜にかなうことであろう。

一体テキストの「読み」とは何であろうか。山野千恵子師が仏教テキストの校訂について大変示唆的な論文を書いており、「プロセスとしてのテキスト」という概念を提示している。テキスト校訂の作業は以下の手順で行なわれる。①現存する文書（写本・刊本）の蒐集、②諸本の系統の整理、③底本と対校本の選定、④全ての文書の翻刻、または底本の翻刻、⑤対照テキスト、または校異の作成、⑥異文を分析し、取捨判定をし、テキストの乱れを解決する、⑦校訂テキストの作成、という手順である。『智山版十卷章』では、同一の高野山版に堅康・弘現・覚本の三人の注記者が書き込みをした三版の異同を校異として採り、併せて三種の読曲資料の異同を採っている。版本と読曲資料は資料的な性格が異なる文書であるから、同一に扱われるべきではないのかもしれないが、読曲文献は十卷章の異読を集めた資料であることから版本の読みを検証するために重要な参考資料と位置づけられる。当初、研究会では版本の朱の書き込みを、運敵の奥書から判断して頼諭由来の古い読みの異読を示したものと解し、運敵が旧点を参照して高野山版を朱によって訂正したものと考えていたが、運敵は頼諭点・根来寺点の旧点を校合していないのは明らかなので、朱は旧点の校異ではなく、運敵が私意によって高野山版を朱点で改めたり注記したりしたものと考えられる。校勘学によれば、校訂には①対校、②本校、③他校、④理校の別⁴⁸があるが、運敵の場合は④理校になる。しかし、諸本のテキスト比較によらない本校・他校・理校は慎重に扱わなければならない、今後は運敵の読みもまたテキスト間の異同や変遷を見極めた上で慎重に精査しなくてはならないであろう。

繰り返すが、重要なことは「江戸期の智積院」などという醜な幻影ではない。我々が範とすべきこと、もつと

も重要であり、かつ目指すべきものは、祖師の精神であり、祖典の読解に真摯に取り組む営為である。堅康・弘現・覚本らが目指し心がけていたことは、江戸期の智積院の読みは何かなどという問題ではなく、敬慕すべき類縁や運敵ら祖師先徳が所持し伝えようとしたテキストを、我々は一字一句誤りなく正確に学ばなければならぬという真摯な姿勢である。その姿勢を伝統的に僧侶は雜僧の頃から素読という学習方法によって叩き込まれていた。伝統宗学の最後の継承者とされる那須政隆猥下が、伝統的な十巻章の読み方と、読曲についてわかりやすく論じておられるので、長くなるがその文章を引用することをもって擲筆したい。那須猥下は『二教論』冒頭に説かれる「法仏の談話」という語句を例に挙げて、次のように述べている。

この「談話」は、私は師匠から「ダンワ」と教わったんです。けれども、豊山の岡田という先生が、読み仮名をつける十巻章の本を出して、「ダンカイ」と仮名をふっておる。それ以来今日では、大正大学の先生方も、法仏の「ダンカイ」と読ませておるらしいですね。私は「ダンワ」と読んでおる。それは何故「ダンカイ」と呼ぶかという理由は、辞書を見ると、談話という「ワ」という音はないです。「ダンカイ」となっておる。だから「ダンカイ」と読むんだと、こういう理屈なんです。

そこで、私はそうかと言っておるが、私は可笑しいと思うんですね。それなら辞書の読み方で直すというならば言い慣わしてきた語の中にも可笑しいものが出てくるんですよ。例えば不殺生・不偷盜なんていう、不偷盜の偷の字、あれはチュウという音はないですよ。辞書を引いても「トウ」という字、「フトウトウ」と読まなきゃいけない。それを昔から「フチュウトウ」と読んでおる。一種のこれは読みくせと言えますね。あるいは矛盾という、矛盾の「矛」の字は辞書には「ム」という音はないんです。「ボウ」というんです。「ムジュン」でない。「ボウジュン」と言わなきゃいけない。けれども「ボウジュン」と言わないで普通「ムジ

ユン」と言っておる。

幾らでも辞書にない読み方というものはありますよ。読みつけてやっておるんです。だから、私は師匠に教わって「ダンワ」と読んでいます。私は加行中に師匠に十卷章の読み方を教わったです。その時に子供ながらに一生懸命に読んで、ほとんど諳んじておるほど読んだものです。だから、いまだに「ダンワ」ということは口にこびりついておるわけです。しかし、今は「ダンカイ」と読ませておりますから、何もそのことあまりこだわらるものではないと思います。そういうことがあるということだけご承知置き願っておきます¹⁹⁾。

実際に那須政隆著『辯顯密二教論』の解説（成田山仏教研究所、一九八七、一七頁）では「談話^{だんわ}」とルビが振られている。これは些細な言葉の問題などではない。那須猥下が師の木村政覚から教わったような体に染み込む師資の伝授こそが、最も重要で尊重されるべきものである。今回出版された『智山版十卷章』は決して智山の決定版の十卷章などではない。あくまで令和という時代に生成された一つのテキストである。「プロセスとしてのテキスト」⁵⁰⁾は常に生成する存在であるので、この読みもまた時代を経て更新されていくであろう。次代にはさらによりよいテキストが生成されることを願っている。

基本資料

- ・『十卷章』（堅康本） 智山書庫二二棚四〇箱
- ・『十卷章』（弘現本） 智山書庫二九棚四七箱
- ・『十卷章』（覚本本） 智山書庫二二棚四九箱
- ・『秘蔵宝籙』（賢秀本） 新文庫蔵No.五八八（みー九六）
- ・『十卷章読曲』智山書庫七棚一〇箱四番
- ・『拾卷章読曲備考』青木恭仁書写本
- ・『十卷章（南山／根嶺）読書撮要』赤塚祐道師蔵本
- ・『塵塚』智山伝法院所蔵本
- ・観心『補忘記』貞享版・元禄版

参考文献

- ・上野和昭「二〇一六」『補忘記 貞享版・元禄版 影印ならびに声点付漢字索引 影印篇』アクセント史資料研究会
- ・大沢聖寛・栗山秀純「一九九六」『小田慈舟大僧正伝授「十卷章」素読 解説』北辰堂
- ・北尾隆心「二〇〇六」『塵塚』解説（影印掲載）『種智院大学密教資料研究所紀要』八
- ・栗山秀純「一九八〇」『塵塚——新義方論議作法——』『豊山学报』二五
- ・栗山秀純「一九九七」『塵塚』と根嶺新義門流の論議『大正大学研究紀要』八二
- ・高野山大学編「一九四二」『十卷章』高野山大学（一九九七改訂七版）
- ・佐藤隆賢「一九七二」『十卷章の読曲について』『智山学报』二〇
- ・真言宗智山派宗務庁「二〇〇七」『真言宗智山派所属寺院聖教・史料撮影目録』全八冊（『全末目録』と略記）
- ・真言宗智山派宗務庁「二〇二〇」『新文庫目録』
- ・智山年表編纂室「二〇一四」『智山年表「近世篇」』真言宗智山派宗務庁（『智山年表』と略記）
- ・中川善教「一九七七」『漢和対照 十卷章』高野山出版社
- ・山本匠一郎「二〇一八」『宗学をいかに学ぶか——素読の意義——』『日本仏教を問う』春秋社
- ・山本隆信「二〇二〇」『引導法にみられる「生仏不二」について』

『現代密教』三〇

註

- (1) 中川善教「一九七七」後序二頁
- (2) 中川善教「一九七七」後序八頁。十卷章の声読みがいつ始まったのかについて「起源は鎌倉時代に発し、あらゆる面に互って悪く言えば類型化が行われた、応永義学の大成の頃に一般化し、高野山僧の間で行われることになったのではないか」としている。また同様に、小田慈舟も十卷章の素読の伝統は、鎌倉時代頃から始まり、それ以前はバラバラであったのではないかと推察している（大沢聖寛・栗山秀純「一九九六」のカセットテープ「十卷章」の素読について）の音源による。
- (3) 月本雅幸「空海撰述書の古訓点について——その性格と研究の構想」『訓点語と訓点資料』七七、一九八七、同「空海撰述書の古訓点の源流について」『小林芳規博士退官記念国語学論集』一九九二
- (4) 『性霊集』巻第十、定弘全八・一八六
- (5) 宗学における素読の意義については、山本匠一郎「二〇一八」を参照されたい。
- (6) 音韻・屈曲・長短などの音声上の区別は、『塵塚』、『補忘記』などにも見られるが、次の論文を参照されたい。水原堯榮「野山四声（俗称声読）考」『水原堯榮全集 第十卷 論文集』同朋舎出版、一九八二（初出『密教研究』二二、一九二六）

- (7) 『塵塚』「乙 声聞之事」参照
- (8) 『補忘記』三二四・右下頁参照
- (9) 『塵塚』「乙 声聞之事」の項「四声往古よりこれ有り。平と入との軽并にフ入声の三つは根来寺の五智坊初めてこれを勤う。故に新義不共と^{三五六}。『補忘記』三二四・右上頁「或いは云く、平・入の軽、及び新濁・本濁・フ入声の指し分けは根来寺五智房已来盛りにこれを相い伝う。故に他山には大分四声の外はこれ無しと^{三五五}」
- (10) 『補忘記』貞享四年版には「根来寺名目集」という副題があるが、元禄版にはない。また「開合名目鈔」とも言われる。各宗名目の梗概は貞享版では冠注に記され、元禄版では凡例に示されている。
- (11) 『補忘記』は各山の名目として八つを挙げる他に、禪家・浄土家・西谷・黄檗山・泉涌寺・醍醐寺・報恩院などの名目を挙げる。
- (12) 『補忘記』三〇四右上頁「用」の項目を参照。
- (13) 小田慈舟師は「よみぐせ」と発音している。大沢聖寛・栗山秀純「一九九六」のカセットテープ「十卷章」の素読について「の音源による。素読の由来と意義について往年の碩学が平易な口調で語っており貴重である。
- (14) 福原麟太郎・山岸徳平編『ローマ字で引く国語新辞典』研究社、二〇一〇。福島邦道「連声と読み癖」『国語学』五一、一九六三。または布施浄慧「仏遺教経の読曲について」『智山学报』二七、一九七八の英文タイトルでは読曲を special pronunciation と記す。読曲は、確かに発音に重きを置くものであるが、厳密には実際の発音がどうであったかは、その伝承が各師によって異なり、また連声の場合などは表記の有無自体が不統一である。そもそも本論文は読曲文献で表記されたところの読み方について考察するものであるから、ここでは idiomatc reading 「慣用的な、独特な読み方」を適切な訳語として採用する。
- (15) 『読曲』奥書「明治十三年^{慶應}秋八月智山学憲筆記畢 房國栄成 右師ノ本依大正十四年夷則廿八日智山ニテ寫畢 辛尤 右師ノ本依大正十五年七月四日於智山勸學院寫畢 有志者」。この栄成がどのような人物であったかは不明である。「その他の読曲文献」で挙げた①③の資料は大沢聖寛・栗山秀純「一九九六」八二―八三頁による。またこの他に「十卷章読曲」一卷、明治十二年（一八七九）高間一明）があるという。④は「全末目録」による。
- (17) 『全末目録』四・三〇〇頁には「十卷章玄証并読曲」とあるが「玄談」が正しい。
- (18) 『釈論百条第三重読曲』は他に智山書庫六棚二箱、二一棚三箱八番、二七棚四二箱の三点がある。
- (19) 『御遺告読曲』は他に智山書庫一九棚一三箱九二番、二七棚三七箱三番の二点がある。また『遺告口決』（一帙七冊中の第七冊）
- (20) 弘治三年（一五五七）、報恩院源雅の口決を玄超房日秀が記したものを。同本が、愛媛教区一番・太山寺蔵「報恩院総伝

- 授読曲、新潟第三教区二二番・弘誓寺蔵『幸心伝授読曲』にある。
- (21) 『薄双紙読曲并難字』などの事相関係の読曲がある。
- (22) 国語学関係の諸論文として以下を参照されたい。桜井茂治「一九七七」、『新義真言宗伝「補忘記」の国語学的研究』桜楓社。桜井茂治「一九八四」、『中世京都アクセントの史的研
究』桜楓社。また両者の書評が有益である。馬淵和夫「一九七八」、『書評 桜井茂治著「新義真言宗伝「補忘記」の国語学的研究』『国語学』一一二。金井英雄「一九八六」、『桜井茂治著「中世京都アクセントの史的研
究」(一九八四)をよむ』『国語学』一四四。雑誌『国語学』は国立国語研究所「雑誌『国語学』全文データベース」で閲覧できる。
- (23) 用…『読曲』「南山ユウ法相門断 根来ヨウと読也」(『備考』「撮要」も同様)。即一一・一、六
- (24) 瓔珞經…堅康・弘現「ツ」。「読曲」「珞 ラツの響に読む可き也。ラクとクにあたるは不可也」(『備考』「撮要」も同様)。即一三・九
- (25) 衆多…『読曲』「多 南山濁、根来清」(『撮要』も同様)。即一九・七
- (26) 五音八音…『読曲』「五音 イン。八音 南山はハツチン、或いはランとも習歟」『備考』「或いは八音の音、呉音にも読む。南山の習歟」『撮要』「ゴイン・ハットン」。声一九・六
- (27) 四種身…『読曲』「身 南山濁、根来清」(『備考』「撮要」も同様)。声三三・一一
- (28) 地墨…堅康・弘現・覚本「ボク・モク」『読曲』「ボク南山、モク根来」(『備考』「撮要」も同様)。咩四八・一〇
- (29) 三句…『読曲』「南山は清 根来は濁」(『備考』「撮要」も同様)。「補忘記」「因根究竟の三句也。是の時のみ句の字、濁也」
- (30) 「能所」の宝門・寿門の読み分けは、水原堯榮前掲論文一一五一頁による。
- (31) 「十卷章の読曲資料」中「その他の読曲文献」で挙げた涼禅の成立で、これは観応「補忘記」と同じ成立年である。『補忘記』は祐宜「大疏百条第三重読曲」永祿六年(一五六三)、『釈論百条第三重読曲』永祿二年(一五六九)の所伝を継承している。今回の論文では取り上げることができなかったが、その他の読曲文献は「備考」・「撮要」とほぼ同じ項目を挙げ同内容であることから、読曲には少なくとも江戸初期、さらに遡って根来時代からの伝承が含まれていることは確実である。
- (32) 赤塚祐道「二〇一七」『中世根来寺における開版事業』『印仏研』六六一「根来寺の炎上とともに版木を失い、根来寺における出版は江戸時代後期まで待たなくてはならなかった」。一一三頁
- (33) 『読曲』三丁右。「智山版十卷章」声一九・六。「版本と読曲資料の異同」参照。

- (34) 『読曲』六丁左。『智山版十卷章』叶五〇・九。「版本と読曲資料の異同」参照。
- (35) 村磯栄俊「智積院歴代化主略伝 丹藤弘現化主小伝 智積院第四十世 丹藤弘現」『智山ジャーナル』九三、二〇二〇を参照。
- (36) 弘現本の書写年代は、弘化四年（一八四七）に行なった講筈を元に、明治九年（一八七六）に再び講読が行なわれたもので、弘現本は明治九年の講読で使用されたものであるから確実な年記としてはむしろ後者の明治九年を採用すべきかもしれない。
- (37) 高野山版の奥書：「任古徳印點之寫本糺平上去入點 輕重清濁猶有假名之正不倭點之 是非歟只期來者之添削耳 萬治三年二月中澣 高野山寶光院第廿四世末葉 應盛（謹書）」
- (38) 泰音：生没年など不詳であるが、『智山年表』安永七年（一七七八）の項に「上野国緑埜岡之郷觀音寺の慈仙房舜譽、弟子泰音の同寺後住職補任願を出す。また、同寺門中の東光院・地藏院も同様の願を出す」とある。また寛政九年（一七九七）の項に「泰音房實苗、『大日経住心品疏講録専心鈔』を書写する」とある。年代的にはこの泰音房實苗と矛盾しないので、この僧かと思われる。泰音房實貫^{生年不明}江戶真福寺十二世とは年代的に異なる。
- (39) 永仁二年：三版はいずれも「永仁三年」と記すが、明らかに誤写であるので改めた。
- (40) 『新文庫目録』一四五一—一四六頁
- (41) 春秋六十九：賢秀本は「春秋六十」と記すが、中巻・下巻の奥書に記載される通り「春秋六十九」が正しいので改めた。
- (42) 純亮房長禪：山崎貞幹編『瀧胴山地蔵院 長徳寺 その歴史と伝説』千葉印刷、一九九六、四一頁。四二頁に「不動明王再修銘」の写真があり、そこにはっきりと名が刻まれている。八九頁の歴代住職にも名を連ねている。
- (43) 下総印旛宝珠院藏聖教『行法肝葉抄下』の奥書。『全末目録』一・二一九頁
- (44) 村山正榮編『智積院史』弘法大師遠忌事務局、一九三四、九四頁
- (45) 乘憲房隆鏝：山本隆信「二〇二〇」四二頁に隆鏝の事績を挙げていたので参照されたい。賢秀・隆鏝・隆誉という相承系譜は、智山の事教二相において極めて重要でありながら、あまり表立って日の目を見ることが少ない、隠された裏の相承であると言えるかもしれない。
- (46) 書き下しは現代表記に改めた。校異は全て省略した。賢秀本には、墨の声点・仮名・点、朱引、朱の導き、朱の句切（以上、頼瑜御点）、朱の声点・仮名・点（以上、根来寺点）がある。また右傍訓・左傍訓がある場合、書き下しでは基本的に右傍訓を採用した。また声点と左傍訓が同時に付される語は、江戸初期まで伝わっていたとされるいわゆる文選読みと思われる、音・義訓を同時に読んでいたと推測される。例えば「書死え諷死えなましかば」は「シヨ・カキタエ、フウ・ヨミタエナマシカバ」といった具合に同じ語を二回

読む。全くの私見であり印象にすぎないが、賢秀本の読みは非常に優れた読みと、時代的に古い読み方（古訓）が散見する。例えばこの箇所「何が為まし」は「ましかば、まし」の反実仮想「もし：ならば：だろう」という古典構文になる。なお『智山版十卷章』は賢秀本の校異を採っていない。

(47) 山野千恵子 「二〇一三」 「テキスト校訂の理論―仏教テキストの校訂―」 『蓮花寺佛教研究所紀要』 第六号

(48) 山野千恵子 「二〇一三」 七七頁

(49) 那須政隆 観下講述 『真言教学と人生―弘法大師の宗教―』 昭和五八年（令和四年改訂再版）、北海道智山青年会（再版・無人の会） 七五―七六頁

(50) 山野千恵子 「二〇一三」 六九頁 「従来、校訂者は、おそろく自身の校訂が「決定版」や「定本」、あるいは少なくとも「最良版」となることを望んで、校訂を行ってきたといえるが、「プロセスとしてのテキスト」という概念を受け入れるならば、この校訂も、他の写本や版本と同様のヴァリエーションの一つにすぎず、「決定版」などは存在しえないということになるだろう。私自身は、このアイデアに甘んじるといふよりは、どちらかといえば肯定的に賛同している者の一人である。」

〔付記〕 那須観下が師僧の木村政覚師から教わった言葉にこだわるわけは、歴史的にずっと続いてきた祖典を、そのままの形通り

に師匠から学ぶ素読という営みは、古い器から新しい器に、教えるという水を注ぎ移す行為であるから、まさに写瓶であるがゆえに、それは譲れないものであり、何物にも代えがたい教えであるからだろう。

ちなみに私は小学三、四年生の頃、父から論語を教わった。正座して背筋を伸ばし、金谷治訳注『論語』（岩波文庫）を手を持って一字一句読まされた。父は私の後ろで新聞紙を丸めた棒を手を持っていて、私が本文を読み違えると背中を棒でポンポンと叩き、読みを改めさせた。そのおかげか、私は国語や漢文などはほとんど勉強しないのにそれなりによくできた方だった。子供の頃から「巧言令色、鮮なし仁」とか「義を見て為ざるは、勇なきなり」などという言葉を覚え、よく意味がわからないながらも自分なりに考えて、何か人生の大事な態度を教わったのだろう。それは今に至るまでの自分を規定しているように思う。

父は、昭和十四年生まれで戦後教育を受け、大学でロシア文学なんぞを学んだから、素読教育など受けたこともないし、自分の主義思想からも遠かったろうに、まだ幼く論語の意味もわからないだろう息子に、なぜそんなことをさせたのだろうか。ついで聞く機会もなく、先年あつげなく逝ってしまった。合掌

（キーワード）

十卷章 読曲 素読 頼瑜 純亮 賢秀 運敵